

千年の時を超える微笑み

ほほえ

平安時代の遺跡と十一面観音像



長谷寺 十一面観音像(榎原)

現在、市内のお寺や神社には、約2900体の仏像や神像が安置されているといわれます。その多くは、江戸時代に造られたものですが、中には遙か平安時代まで遡るものが35体、その中でも特に古い10〜11世紀、つまり平安時代中頃まで遡る仏像や神像も7体遺されていて、南アルプス市の信仰の歴史の深さを知ることができます。

平安時代中頃までの仏像は、一木^{※1}(いちぼく)造りという古い素朴な技法によって作られているのが特徴です。今回はこの中から、寺部の円通院と榎原の長谷寺の十一面観音像を紹介します。

円通院の観音像は、10世紀後半から11世紀前半の作と見られ、同じく平安時代に造られた毘沙門天、不動明王を促しています。温和な微笑を浮かべる観音像は、元々は「目見入観音」とも言われていて、秘仏^{※2}として信仰されてきましたが、昭和59年にお寺が焼失し、その後廃寺となってしまったため、現在は下今井の隆円寺で守られています。

長谷寺の観音像は、円通院より少し遅れた造立と見られ、素材の霊木の力がそのまま宿るような神秘的な微笑みをたたえます。現在も、そのお堂自体が国の重要文化財である「長谷寺本堂」に33年に一度公開される秘仏として安置されています。

ところで、南アルプス市内には現在、470カ所を超える遺跡が存在します。その時期は旧石器時代から

注
 ※1 一木造：一本の木から像のほぼ全てを彫り出し、像の内部をくりぬいて中空とする内刺(うちく)りを施さない造り方
 ※2 秘仏：通常、一般に公開されない仏像
 ※3 牧：馬や牛の飼育施設



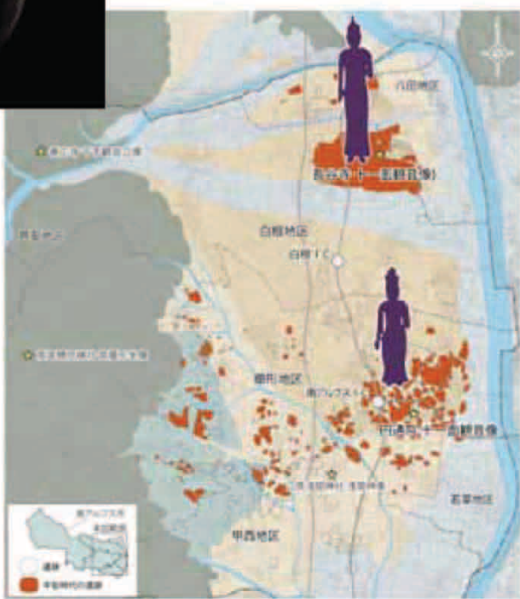
円通院 十一面観音像(寺部)



円通院十一面観音像の両脇侍
(不動明王・毘沙門天) 像



平成22年度に長谷寺のすぐ南で行われた発掘調査。中央の穴は発見された平安時代の竪穴住居跡



市内の平安時代の遺跡と10・11世紀の作例

現代まで約2万年にわたりますが、この内平安時代の遺跡と、この2体の観音像の安置された位置とを地図に示してみました。

すると、御勅使川扇状地扇端の豊かな湧水に支えられた寺部から十日市場にかけての地域と、この時期に大規模な「牧^{※3}(まき)」があったと推定されている上八田を中心とした地域という、市内平安時代の2大遺跡群に、集落の信仰の中心として、これら観音像がそれぞれ安置されていることが判ります。

千年の時をこえて、現在も穏やかな微笑みを浮かべる観音様。人々の厚い信仰に守られ、南アルプス市の歴史をみつめてきました。そして、これまで南アルプス市に生きた人々に大切に守られてきたからこそ、現代の私たちも遺跡に生きた人々と同じ、この微笑みを見ることができるとは。

※今回紹介した観音像は、いずれも信仰の対象であり現在一般にひろく公開しているものではありません。なお、長谷寺の観音像の次回のご開帳は平成33年の予定です。